郷土史話

岡城と知覧勢

黒田　勇

由来、歴史というものは其の編者の如何で時に史中の人物に対する好悪が異なるもののようである。今、週間朝日連載中の「新平家物語」の作者、吉川英治氏も何かの茶話で「平清盛親」について「これまでの歴史や物語では清盛という人物はどうも悪人のように書かれているが、自分には左様には思えぬ、従つて清盛の人間味や、其情熱や思想、政治性等を考えて筆を取ると出来上つた小説はどうも清盛が好人物になつて、よく読者から賛辞やら皮肉やら聞かされることがある。」と言つたような述懐をされていたことがある。特に郷土の歴史などに一層そうした傾向があるのではなかろうか。これは人として誰にもある「身びいき」や「郷土びいき」が、そうさせるものと考えられる。私は十数年前、鹿児島に遣つてあつた子供から一枚の新聞切抜（鹿児島日報）を送つて来たことを思い出したので、このごろそれを探し出して読んで見た。それは天正年間島津義弘の豊後襲撃を取扱つた薩軍中の「知覧勢の奮闘史」とも称すべきものである。我が豊後岡城に於ける当時の物語は、筆者の知る限りでは「筑豊乱記」巻下（岡城攻之事）「両豊記巻一七」（岡城合戦之事）「西治録」（薩兵岡城を襲事鬼ケ城軍）「救民証」（薩軍乱入之事）其の他豊薩軍記等であるが、何れを見ても当時岡城の戦争は彼の青年武将の志賀親次の奮戦大捷の事ばかりで、島津軍殊に知覧勢の働きについては少しも記述がない。で私はいささか面倒ではあるが、前記知覧勢に関する同地の郷土史なるものを左に抜記して各位の御参考に供したい。

豊臣秀吉の大軍が九州に攻め入ると共に、薩摩軍は退却して国境線でこれを喰いとめることに方針を決定し、この旨を全軍に通知した。勿論、島津義弘公は、豊後国竹田城の守備の任に当つていた佐多久政にも、急使を送つて退却を命ずると共に、公は天正十五年三月十二日府内迄兵を退いたのである。ちようど其頃、豊後国菅迫城主の志賀播磨は、義弘公と締結していたので公がさきに同地へ兵を進めた時には、播磨は薩軍の伊集院三河守と犬童休意を城に迎え協力して城を守つていた。

ところが豊臣秀吉の大軍がいよ〳〵間近に迫つて来た時、豊臣方の大友義統は菅迫城の志賀播磨に密使を遣わして「今、薩軍は退却の一路を辿つている、此の時我に味方して薩摩の伊集院、犬童の二将を殺して薩摩軍を追払うなら、豊公は戦後重く賞を与えよう」と云つて来た。志賀播磨は其使に対

して「馬鹿!!!」と大喝した上「武士に二道はない」と手紙を認め、なおそれを使者に持たせて返した。

これを見て豊臣軍は大いに怒り三月十三日朝ついに大森弾正に命じ、千五百余人を率いて、菅迫城を攻撃させたが、志賀播磨は寡兵を以つてよく奮戦しこれを撃退した上、翌十四日薩軍の命ずる通り、城を去つて国境線へ退却したのである。

志賀播磨は間もなく新納忠光の軍に合して大口に入り、その後飯野に移つたが戦雲がおさまつてから志賀は高原の江宇村のうち禄高五十石を賜つてここに居住した。その後播磨の男嘉兵衛は出水に移住し、其子孫は出水の郷士となつて栄えたということである。現在同地の志賀氏は其の子孫が多い。

斯くして薩摩軍はどしどし国境線へと集結したのに、どうしたものか竹田城の守備役、佐多久政以下五十二名の将兵は未だ退いて来なかつた。部下思いの義弘公は気が気ではない。再び急使を竹田城に送つて「一刻も早く国境線へ引揚げるように」促した。だが、竹田城の勇士たちは遂に帰つて来なかつた。

× × ×

天正十五年三月十三日朝、竹田城の大広間では守備役の佐多久政以下知覧兵五十二名の薩摩隼人が集つて守備摩の進退について大評定が行われていた。

以下郷土史の中からその最後の軍議の模様をのぞいて見ることにしよう。天正の昔と昭和の今、時と所とこそ変れそれはアツツ島の勇士たちの最後の心にも相通うものがあるのではあるまいか。

まず佐多久政は上座に坐り、威儀を正して一同を見渡すとすでに豊臣の軍勢は我が九州に入り込んで、どしどし南下の攻勢をとりつつある。殊に北九州に於ける豪族どもは秀吉の西征に逢うて、一たまりもなく変節致したのである。

と悲痛な面持で口を切つた、一座は唯黙々として久政の方を見守つた。久政は更に語をつづけて、

薩摩軍が兵を引き揚げようとする形勢を見ると、これ等の豪族共は言い合せたように俄に我が薩摩軍の帰路をさえぎるものや或は進襲して来るもの、さては引き揚げる薩軍を追跡するものなど友軍は誠に苦戦している有様である。五十余名は正坐したまま身動きもせず何れも久政の次の言葉を待つた。大広間は重苦しく語る久政の声ばかり……

さて只今までの、わしの手許に達した情報によれば、薩軍は全くこうした混乱のうちにこれらの敵陣を突破して国境の線へ入りつつあるということである。実は義弘公から本日使者を遣わされて竹田城のわれらに退却せよとの御命令を受けているのじゃ。

と、言いも終らないうちに、
退却とは腑におちもさぬ。
と末座の若者が叫んだので一座は騒然となつた。久政は騒ぐ一同を制しながら、
義弘公からは我らに引揚げるようにおすすめの御書翰を受けたのである……その為め御一同の集りを願つたような次第……
此の時、家老の平田大学は立ち上つて、
恐れ乍ら太守様からの御書翰の内容を今少し詳しく承りたい。
久政は静かに義弘公の書翰を取り出して、黙つて目を通していたが、やがて、
されば じや、太守義弘公よりの御書状には我が軍は直ちに兵をまとめて退却し、後陣にて万全の用意をして防げよと仰せられている。なお詳しくは、このお使の者よりお話があろうと思いお引き留め致しておいた。
と傍らの使者大久保貞家をかえりみた。貞家は一礼して使者としての挨拶をすませた上、
実は太守様の御意思は、この危急存亡の時一時の苦衷を忍んで、最後の勝利を得ようとの御考えでございます、そして……
と話をつづけようとするうちに早くも隼人たちは憤然として沸き返つた。
即ち守備の将兵は何れも悲憤の心をおさえ切れなかつた。
使者の大久保は、
戦陣において退却することは、まことに卑怯な事ではありますが、敵をあざむいて深く誘い込み、我の防備が固く出来たところを見はらかい、一度に攻めたつれば、勝利は必定と存じます。このたびは其の為の退却であります、何卒使者として、それがしの役目を果させて下さい……
貞家の報告が終ると久政は、暫く静かにと一同を制して後、この大切な時機部下各自の腹蔵なき意見を求めた其の結果、

伊佐敷久理……永遠に武士の名を辱しめたくない……と退却不賛成
池田四郎……十幾万の兵を持つ敵を少数の味方が欺いて深く誘い込むなどとは児戯に等しいとこれも退却不満
朝隈兵部……同感
村岡休内……此の策は大友や伊東には效き目はあろうが豊太閤に対しては子供だましだ。と嘲笑的

使者大久保が、
でも薩藩大事の時、理窟は左様でも、
と言えば、

竹田城を見捨てよというのか。
おめおめと薩摩隼人が退却出来るか。
議論沸騰の末、池田四郎の、
われわれ五十余人は、小勢ながら幾多の同志が血を流して戦い取つたこの城を枕に十数万の大軍に向い武士の最後を飾ろうではござらぬか。
との動議に、松本源助を始め一同同感、茲に決死の機運がみなぎつた。
神まれ。諸士のその意気は誠に嬉しい。だが退却せよとの義弘公よりの御命令は上様から賜つた我々の生命である。で只今あらためて其生命を上様に捧ぐべく、竹田城に薩摩武士の華を咲かせようではないか。
と言う久政の情理に徹した最後の言葉に、一同は容を改め、茲に城を枕に討死の覚悟を決めて誓約した。其の氏名は、
佐多久政、伊佐敷久理、赤崎神祗、山中平内左衛門、村岡休内、山内藤太左衛門、朝隈兵部、鮫島四郎左衛門、名越助左衛門、安藤欣之助、池田四郎等
五十二名で、次々に連判状を認め終りこれを使者に托した。
三月十三日夜、最後の酒宴を張り豊臣軍に応戦した。その時の戦斗の模様を知覧郷土史には次のように記してある。
何れも甲冑に身をかためて、出てて戦ふ、健闘夜明けに及び刀折れ矢尽き、糧又果てて万事休す、敵兵群衆蟻し附して城壁に迫り肉迫甚だ急なり、久政屈せず、白刃をかざして敵を壁間に斬ること数を知らず、遂に五十二名の主従枕を並べて壮烈の最後を遂げたり。
時は久政は四十二歳、
本編は知覧町塩屋松本清栄氏より史料提供、写真は知覧町にある島津氏の墓所。
の附記があつた。
これによつて見ると、我が岡城はこれより先一応は知覧勢の手に落ちたもののようであるが、長期連載の新聞記事（昭和十八年十月鹿児島日報所載、戦時版、鹿児島外史、激烈薩摩士魂と題す）のうち四十回より以前がないので、岡城戦闘の様子が判らない。で筆者は大東亜戦終結後知覧町役場にこの郷土史のことを照会したが、同地は戦争中著しい戦禍で丸焼となり、斯かる資料は一物も存せぬと言う回答に接した。
（竹田市）